Japanese Association for Religious Studies

える役割をも果たしている。

エリアーデがシカゴ時代に提唱した解釈学としての宗教学の方法論にも、宗教と芸術が共にその射程に収められている。彼の述べる「創造的解釈学」は、「対象を解釈しその価値を解明するとともに、その結果として解釈者や、その読者をも変革するという、価値の拡大の運動に参与する学」と定式化できるが、これはあらゆる領域を対象とし、哲学家、芸術家、芸術批評家に影響を及ぼすとされていた。このような領域横断的な側面が強調された学問形態が、「新しいヒューマニズム」と呼ばれているものである。

こうした基礎を有していたために、エリアーデは芸術作品の解釈が可能であった。その例としては「インドの芸術と図像」や「ブランクーシと神話」における論述が挙げられる。そして「新しいヒューマニズム」の構想の実現とみなせるものとして、芸術分野へのエリアーデの影響を観て取ることができ、とりわけ建築学にはエリアーデの聖なる空間理論の応用の例が存在する。

エリアーデの理論が芸術に対しても向けられたものであったとするならば、狭義には「美」という概念への哲学的な思惟であり、広義には芸術作品の分析や美術史を含む美学の観点からは彼の理論はどのように評価されうるであろうか。これを明らかにするために、エリアーデと美学における理論との比較を行なう。ここでは両者が共通して有する見解として、「非論理的認識の強調」、「研究対象に向けられた存在論的見解」、「シンボルへの関心」、「解釈学の展開」という四つの要素を挙げることができる。これらの要素は、エリアーデの理論が宗教現象を説明するためのものでありながら、同時に美学理論としても機能しており、美学の伝統の中に位置付けることが可能であるという主張を支持するものである。

以上の議論を宗教学全般に対する見解へと広げることは可能であろうか。そのための糸口は、これまでの比較によって導かれる両者の根本的な共通点、「非理性的なものへの着目」にあると考えられる。宗教学においても美学においても、理性ないし論理では把握し尽くされない領域の仮定が、多くの理論をもたらしてきた。これは両分野において指摘されるように、近代科学に対するアンチテーゼとして成立したという意味において、「近代の産物」ともみなすことはできるが、近年ますます脚光を浴びるようになっている種々の「科学的手法」を補うものとしての、美学の見地に学んだ宗教学といった形の理論も、その意義を失ってはいないのではないだろうか。

在ポルトガル・ルーマニア大使館における エリアーデの宗教思想

奥山　史亮

本報告は、エリアーデがポルトガル期（一九四〇―四五年）に執筆した資料を整理し、異国であるポルトガルで描かれたルーマニア宗教文化の特徴を明らかにした。エリアーデは戦中、リスボンのルーマニア大使館に文化参事官として勤務した。文化参事官としてエリアーデは、ルーマニアとポルトガルが共有する宗教性について記述することをせまられ、地域横断的な文化現象として「宗教」に関する思索を深めた。さらに、ソヴィ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

エトのルーマニア侵攻の報告を受けて、故国に残った家族や友人の安否、宗教文化の存続について不安を募らせながら研究活動を行なった。これらについては、ルーマニア大使館刊行の雑誌『動向』に掲載された論説、およびポルトガル人の歴史学者であるアルフレッド・ピメンタと交わした書簡を読解することにより確認できる。

『動向』に一九四二年に掲載された論説「ドール〔郷愁〕――ルーマニアのサウダーデ」では、ポルトガル語のサウダーデ（saudade）とルーマニア語のドール（dor）という言葉が両民族の共通性を示す根拠とされている。いずれも、現在は手にしていない事物に対する郷愁をあらわす言葉であるが、神的存在から離れて在ることに対する怖れや孤独感もあらわし、きわめて近い意味をもつという。神的存在に対する郷愁は、他国からの侵略を頻繁にこうむってきた両民族が歴史上、重要視してきた感情であり、民間伝承詩や民間儀礼といった宗教文化の源泉になったとエリアーデは述べる。そのようなルーマニア宗教文化の代表としてエリアーデがあげるのが、棟梁マノーレ伝説という民間伝承詩である。

棟梁マノーレ伝説は、東欧地域一帯に流布した人身供犠を主題とする民間伝承詩である。エリアーデはこの民間伝承詩の特徴を、「創造的な死」の描写にみる。エリアーデによれば、生け贄にされた人間の魂は尽きておらず、宿る身体を肉体からほかの事物に変えることで存続する。このような世界観においては、死は魂の絶対的消滅ではなく、異なる存在様式へ移行する契機であるという。この「創造的な死」という観念は、エリアーデによれば、ルーマニアの国土を守るために戦い命を落とした同胞たちの死に、国や民族のあらたな在り方へつながる創造的犠牲という意味を与える役割を担ってきた。さらにエリアーデは、棟梁マノーレ伝説を基層とするゆえに、ルーマニアの宗教文化がソヴィエトの侵攻によって根絶されることもないと述べる。

ソヴィエトの侵攻からルーマニアの民族、文化、宗教を防衛する方法を提示することは、文化参事官であったエリアーデがその解決にもっとも力を注いだ問題であったと考えられる。エリアーデのこのような問題意識は、とりわけピメンタと交わした書簡に記されている。ピメンタへ宛てた書簡からは、ルーマニアとポルトガルがラテン・キリスト教文化を共有していること、ソヴィエト・ボルシェヴィキ・共産主義がラテン・キリスト教・ヨーロッパ文明の対極に位置づけられていることを読みとれる。さらに、同種の文化に属するルーマニアとポルトガルは互いの民族の存続のために、ソヴィエトに抗する「聖戦」において協力しなければならないとエリアーデは述べている。

以上の資料からは、ルーマニアの「宗教」を対ソヴィエトの枠組みのうちに位置づけると同時に、西欧のラテン系諸国と共有する文化要因としてエリアーデが理解したといえる。このようなポルトガル期における言論活動は、文化参事官としての「職務」であった。しかしポルトガルという異国におけるエリアーデの言論は、亡命後、親サラザール、反ソヴィエトという面は目立たなくなりながらも、歴史的苦難＝「歴史の恐怖」に抗する宗教的人間の文化形態を地域・時代横断的に記述する点において引き継がれたといえる。

NII-Electronic Library Service